

過去を表す動詞形式

——英仏比較文法の試み——（その1）

梅原 大輔・柏岡 珠子
杉浦 茂夫

0. 序 論

ある言語の文法形式（たとえば、フランス語の半過去形）は、その言語の他の文法形式（たとえば、複合過去形、単純過去形、大過去形など）と整合性を保持しながら、一つの文法体系（この場合は、時制体系¹⁾）を形成している。従って、一つの文法形式の意味・用法の研究は、他の文法形式との比較・対照によって行なわれるのがふつうである。しかし、別の言語の文法形式を視点に入れて比較研究を行なうことによって、一つの言語内だけで考察していたのでは気付かれないような事象が明らかになる可能性もあると思う。柏岡（1989）もそのような場合の一例で、フランス語を学ぶ日本人学生が陥り易い誤りを、日仏両語の時制体系の相違から解明しようとしたものである。本稿では、英語とフランス語の時制体系を比較・対照し、一方の言語だけを見ていたのでは明らかでない事象を、他言語からの光を当てることによって解明しようと思う。

Quirk *et al.* (1985, p. 27) は、「干渉」に関して次のような記述がある。

- (1) The Frenchman who says *I am here since Thursday* is imposing a French grammatical usage on English;...

これは、フランス語の *Je suis ici depuis jeudi.* を直訳したもので、このことから、次の二点が明らかとなる。

- ① フランス語の現在時制は、過去の一時点から現在まで継続している状態を意味しうるのに、英語の現在時制はそれを意味しえない。
- ② 上の引用文の英文は、当然 *I have been here* となるべきであるが、‘have (avoir)+過去分詞’ という形式は、英語では現在完了となるが、フランス語では複合過去 (*passé composé*) となり、それらの用法は異なる。

本稿では、以上のような観点から、究極的には両言語の時制体系全体の考察を目標としながら、差し当たっては、フランス語の直説法「半過去」, 「複合過去」, 「単純過去」, 「大過去」の4形式と、それらに該当する英語の時制形式との比較研究に対象を限定したいと思う。

なお、本稿では、フランス語に関する部分は柏岡、フランス語と英語の橋渡しの部分は杉浦、英語に関する部分は梅原が主として担当し、それらの原稿を三人で検討し合ったことを付記しておく。

0.1. 方法と構成

筆者たちは、英語あるいはフランス語の *native speaker* ではないし、ましてや *bilingual speaker* ではない。日本語を母国語とし、外国語としてこれらの言語を学んだ者である。従ってわれわれに許される方法としては、翻訳書をその原典と比較対照して資料を集め、それらの資料を文法書から得られる知見によって分析するということにならざるをえないと思われる。翻訳書を資料として利用するに際し、もっとも注意すべきことは、翻訳者の力量や言語感覚に依存する部分と、両言語の文法体系の相違を反映している部分とをどのように区別するかということにあると思う。われわれの採った方法は、多くのジャンルにわたって調査を行い、翻訳者の個性を平均化することであった。本稿(その1)では、試し堀りの一つとして、Conan Doyle;

The Adventures of Sherlock Holmes の中の一編と、その翻訳を資料とし、両語間の時制体系の間にどのような対応関係が存在するのかを統計的に提示し、この時点で言いうることを述べてみようと思う。(その2) 以下で各種のジャンルにまたがる資料からの調査を行い、それらの調査結果に基づいて、各時制形式の分析を行おうと思う。

1. 資料の提示

本節では、Conan Doyle, *The Adventures of Sherlock Holmes* の中から、‘The Five Orange Pips’を選び、そのフランス語訳と対照した結果を示す。本節で使用したテキストは次のものである。

英語 *The Adventures of Sherlock Holmes* (1917). John Murray Ltd.

仏語 *Les Aventures de Sherlock Holmes* (1956). Le Livre de Poche.

1.1. 作業上の手順

上記の二書の対照により、376件の対応例を見出したが、対応例と認定できるかどうかについての作業原則を明示しておきたい。

① 表現構造が類似していて、単語の意味も一対一の対応をしている場合は対応例として認める。

(2) When Lee *laid*₁ down his arms my uncle *returned*₂ to his plantation, where he *remained*₃ for three or four years. (p.106)

(2') Quand Lee *capitula*₁, mon oncle *retourna*₂ à sa plantation où il *demeura*₃ trois ou quatre années. (p.155)

この例は、構文もほぼ同じであり、使用されている単語の意味も一対一の対応関係をなしている。

② 一方の言語で、定形動詞の形として表現されていない場合は、対応例として認めない。

(3) ... the equinoctial gales *had set in*₁ with exceptional violence.
(p. 103)

(3') ... les tempêtes d'équinoxe *faisaient*₁ rage; leur violence *était*₂
exceptionnelle. (p. 151)

イタリック体 1 の動詞は意味が同一とは言えず, ③であらためて取り上げるが, (3') の 2 の動詞は, 英語では「形容詞+名詞」表現の中に吸収されていて, 対応例と認めることはできない。

(4) Let me have the date of the reception by your uncle of the letter, and the date of his supposed suicide. (p. 109)

(4') A quelle date votre oncle *reçut*₁-il la lettre, et à quelle date se ... *suicida*₂-t-il? (p. 159)

(4') の動詞は二つとも英語では名詞表現になっている。

(5) As I *waited*₁, I *lifted*₂ the unopened newspaper from the table and *glanced*₄ my eye over it. It *rested*₅ upon a heading ... (p. 120)

(5') En *attendant*₁, je *pris*₂ le journal du matin qui n'*avait* pas encore *été déplié*₃, et je l'*ouvris*₄. Mes yeus *se fixèrent*₅ sur un gros titre ... (pp. 174f.)

この例は複雑である。対応例として認められるのは, 2 と 5 のみである。1 はフランス語の方で現在分詞が用いられている。3 は英語では unopened という過去分詞で表現されている。4 は単語の意味が違うので, ③であらためて取り上げる。

③ 意味の異なる動詞が用いられていて, その意味の相違が動詞の時制の選択に影響しそうな場合は, 対応例とは認めない。上の (3), (3') の例で「(嵐が) 始まる」という表現と, 「(嵐が) 荒れ狂う」という表現は, 時制の選択に影響を及ぼしそうである。また (5), (5') の「目を走らせる」と

いう行為と,「(新聞を)開ける」という行為の間にも,同様の関係が認められる。従って,これらの例は対応例とはしない。

(6) ... you *have ever listened*₁ to a more mysterious and inexplicable chain of events than ... (p.105)

(6') ... vous *avez vu*₁ une succession d'événements plus mystérieux et inexplicables que ... (p.154)

この例では, listen to に対して, écouter または entendre ではなく, voir が用いられている。聴覚から視覚への転移が生じたわけである。しかし, この転移が時制の選択に影響を及ぼすことはないと思われるので, 対応例として認めることにした。

以上三つの作業原則を示したが, 実際の作業に際しては, 特に③に関して迷う場合があったことを付記しておかねばならない。

1.2. 比較と結果と分析

対応例として認めた 376 例の対応関係をまとめると, 次のようになる。

表 1

英/仏	大過去	単純過去	複合過去	半過去	現在	計
現 在			4	5		9
現 在 完 了	3	2	30			35
現在完了進行				1		1
過 去	11	146	39	101	2	299
過 去 進 行				2		2
過 去 完 了	21		4	2		27
過去完了進行				1		1
そ の 他		could they have		would be		2
計	35	149	77	113	2	376

この表からいろいろなことが読みとれると思う。たとえば、英語の過去完了形とフランス語の大過去は、かなり重複した用法を持っている可能性がありそうである。しかし、サンプル数も少なく、もっと確実なことは（その2）以降において検討したいと思う。

ここでは、英語の過去形にフランス語の半過去、単純過去が対応している例が比較的多いので、最初にこの対応例について分析しておこうと思う。英語の過去形に対してフランス語の半過去が対応している101例、フランス語の単純過去が対応している146例、合計247例を（過去の）「習慣」、「状態」、「動作（出来事）」という三つの意味範疇に分けてみることにした。標準的なフランス語の文法が説明するとおり単純過去は一回の動作を表し、半過去は状態や習慣を表すことがよくわかるが、特に半過去は「もっとも表現力に富み、もっとも陰影をそなえた、すぐれて〈文学的な〉時制である。」（佐藤 1990, p. 47）と言われるので1. 2. 1. でなるべく詳しく取り上げたい。

また 1. 2. 2. では複合過去と単純過去の使われ方の比較をする。フランス語の初歩的な文法書では、この両者の違いを会話体と文章体という文体の違いとして簡単に済ませているものが多い。ここでは複合過去についてのサンプルがあまり多くないので断定的なことは言えないが、両者の違いをもう少し詳しく検討するつもりである。

1. 2. 1. 半過去に対応する英語例文の分析－状態と習慣

半過去はまず、過去のある時点での主語の状態を表す文で用いられている。（以下例文中斜体字の動詞がフランス語で問題の時制になっている）

- (7) a. “My father *had* a small factory at Coventry, ...” (p. 106)
- b. “(I) could go where I *liked* and do what I *liked*, ...” (p. 107)
- c. “There *was* nothing else save the five dried pips.” (p. 108)
- d. “but I *knew* that the ship must have an American origin.”
 (p. 123)

以上の *have, like, be, know* のような典型的な状態動詞の他に、次のような例もまた状態を表している文と考えるとよいだろう。

- (8) a. "... he glared at the envelope which he still *held* in his trembling hand." (p. 107)
- b. "These, we presume, *indicated* the nature of the papers which had been destroyed by Colonel Openshaw." (p. 110)
- c. "Some of them were of the war time, and *showed* that he had done his duty well, ..." (p. 110)
- d. "The body *exhibited* no traces of violence, ..." (p. 121)

これらの動詞は通常進行形でも用いることができるので本来的には動作を表す動詞と考えられる。しかしこの例はいずれも特定の出来事ではなく状態を表しており、それゆえ半過去に訳されている。

英語の進行形は動作動詞を状態化して用いるための表現と考えられる。このため英語の進行表現はフランス語では半過去によって表される。今回のテキストでは次の2例の過去進行形が半過去で訳されていた。

- (9) a. "The fire *was burning* brightly", (p. 108)
- b. It had cleared in the morning, and the sun *was shining* with a subdued brightness through the dim veil which hangs over the city. (p. 120)

動作動詞が半過去になるとき、過去進行のような状態を表すのでなければ、それは習慣的行為という読みを受けることになる。過去の習慣は英語では助動詞 *would* の助けを借りて表されることも多い。以下はそのような習慣的過去の例である。

- (10) a. "He *drank* a great deal of brandy, and *smoked* very heavily, but he would *see* no society, and *did not want* any friends, not even his own brother." (pp. 106-107)

- b. “Most of his time he *would spend* in his room, with the door locked upon the inside, but sometimes he *would emerge* in a sort of frenzy and *would burst* out of the house and *tear* about the garden with a revolver in his hand, ...” (p. 109)

また次のように *always* や *usually* といった頻度の副詞と共に用いられている場合も、特定の出来事に言及しない習慣的過去であると判断できる。

- (11) a. “It looks as if they always *sent* their singular warning or token before them when starting upon their mission.” (p. 117)
 b. “Its outrages *were* usually preceded by a warning sent to the marked man in some fantastic but generally recognized shape...” (p. 119)

このような状態表現と習慣表現を見るならば、そこに共通するのは「特定の出来事の不在」ということではないかと思われる。言い換えれば、特定の始まりと終わりを持たない過去の事態はフランス語では半過去という独立した文法表現でもって表されると考えられる。このような見通しのもとに、もう少し微妙な例を取り上げてみよう。

- (12) As evening *drew in* the storm *grew* louder and louder, and the wind *cried* and *sobbed* like a child in the chimney. (p. 104)

これは事件の依頼者がホームズのもとにやってくるある嵐の夜の様子を描写したものであるが、斜体字の動詞がいずれもフランス語では半過去で訳されている。これらの動詞はいずれも動作を表す動詞であるが、ここでは一回きりの特定の出来事を指してはいない。前半の二つの動詞は、接続詞の *as* の影響によって未完了の解釈を得ることになる。また後半の二つの動詞も一回きりの出来事ではなく、反復的な状況を表している。これらの例はいずれも進行形でもなく、習慣を表すとも言いがたいが、このような表現はある意味で状态的であるということができのたろう。実際、変化を表す *as* 節の中

で動作動詞が半過去に訳されている例が他にもある。

- (13) a. “the sensation grew less keen as the weeks *passed*, ...” (p. 108)
 b. ... he watched the blue smoke ring as they *chased* each other up to the ceiling. (p. 115)

さて、もう一度 (12) の例文に戻る。(12) によって表されたこの嵐の夜の描写の続きに次の文がある。

- (14) Sherlock Holmes *sat* moodily at one side of the fireplace cross-indexing his records of crime, whilst I *was* deep in one of Clark Russell’s fine sea stories, ... (p. 104)

ここで注目したいのは *sit* である。ここではもちろんこの動詞は状態動詞として用いられている。しかし同じ状態を表す *sit* が単純過去で用いられている次のような例がある。

- (15) Sherlock Holmes *sat* for some time in silence with his head sunk forward, and his eyes bent upon the red glow of the fire. (p. 115)

一見非常によく似た (14) と (15) の文であるが、(15) では *for some time* という表現が示すように、この Holmes の状態が一時的で、始まりと終わりがあることを意識させている。実際このあと “*I think, Watson, he remarked at last.*” というように Holmes は沈黙を破っているのである。状態動詞でも始まりと終わりが明らかであれば半過去にはならない他の例を示そう。

- (16) a. “When Lee laid down his arms my uncle returned to his plantation, where he *remained* for three or four years.” (p. 106)
 b. “During all the years he *lived* at Horsham I doubt if ever he set foot in the town.” (*ibid.*)

a. では (15) の場合と同じく、*for three or four years* という句によって

remained が期間の限定した状態になっている。また b. では *during all the years* という部分によって *lived at Horsham* という状態が閉じたものであることが明確になっている。このため状態動詞であっても半過去にならないのだと考えられる。

1. 2. 2. 単純過去と複合過去に対応する英語例文の分析

半過去とは対照的に、フランス語の単純過去と複合過去は過去の特定の出来事を表すのに用いられる。そのうち単純過去は、話し手の現在とは切り離された過去を表すとされ、それゆえ文章体で用いられる時制であると言われる。一方複合過去は本来現在完了から生じた時制であるため話し手の現在との結びつきが強く、それゆえ会話体で用いられると言われる。しかし単純過去と複合過去の区別はこのような単純なスタイルの問題だけで片付けられるものではなく、過去の出来事に対する話し手の心理により深く関わっていることがわかる。

このテキストの中では依頼者がホームズに事件の経過を物語る部分がかなりを占めているのだが、その中でもとりわけ客観的な過去の事実を時間を追って語るくだりでは単純過去が多用されている。

- (17) a. “My uncle Elias *emigrated* to America... and *became* a planter in Florida, ...” (p. 106)
 b. “At the time of the war he *fought* in Jackson’s army, and afterwards after Hood, where he *rose* to be colonel.” (*ibid.*)
 c. “About 1869 or 1870 he *came* back to Europe, and *took* a small estate in Sussex, near Horsham.” (*ibid.*)

ホームズの一続きの行動を描写する地の文にも単純過去が連続して用いられている。

- (18) He *took* an orange from the cupboard, and tearing it to pieces, he *squeezed* out the pips upon the table. Of these he *took* five,

and *thrust* them into an envelope. (p. 122)

このような客観的な語りの部分に対して、依頼者とホームズとの間で交わされる会話部分のうち特に一人称や二人称を主語にする文には複合過去が使われている例が多い。次の引用は死の予告を受け取った依頼者が警察に行っても相手にしてもらえず、考えあぐねた末ホームズの名声を聞きつけて相談にやってきたと話す部分である。このうち斜体になっている動詞がフランス語では複合過去に訳されている。

(19) “They *have*, however, *allowed* me a policeman, who may remain in the house with me.”

“*Has* he *come* with you to-night?”

“No. His orders were to stay in the house.”

Again Holmes raved in the air.

“Why *did* you *come* to me?” he said; “and above all, why *did* you not *come* at once?”

“I did not know. It was only to-day that I *spoke* to Major Prendergast about my trouble, and *was advised* by him to come to you.”

“It is really two days since you *had* the letter. We should have acted before this.” (p. 113)

また次の例はホームズが自分がとった一日の行動をワトソンに聞かせる部分である。時間を追って出来事を描写している点では上の(18)の例と同じなのであるが、(18)とは対照的に複合過去で表現されている。これは単に現在に近いことを語っているという時間的な近さ以上に、主語が一人称であることと大に関係があると思われる。

(20) “I *searched* the Dundee records, and when I *found* that the barque Lone Star was there in January, ’85, my suspicion *became*

a certainty. I then *inquired* as to vessels which lay at present in the port of London.” (p. 123)

以上のように、同じような引用符の中の文でも、過去の出来事を客観的に述べる語りの部分では単純過去が、対話の部分には複合過去が用いられる傾向のあることがわかる。しかし逆に、地の文の過去時制が複合過去に訳されている例は、このテキストでは一例も見つけることができなかった。

1.3. 英語とフランス語を比較して

英語で進行相は *be+~ing* という複合的な表現で表される。また過去の習慣は助動詞の *would* によって表されることが多い。このように英語では助動詞の助けを借りて複合的に表現されるものが、フランス語のように動詞の時制として表現されるときどのような違いが生じるだろうか。

一例として状態動詞を取り上げてみよう。英語では状態動詞が単純過去で用いられた場合、その状態が閉じているのか開いているのかという区別はなされない。これに対してフランス語の場合には状態動詞にも閉じた状態と開いた状態とが表現上区別される。これは先に (15) (16) で見たとおりである²⁾。

もう一つ半過去と単純過去が対照的に用いられている例として、*could* や *was able to* といった可能表現がフランス語でどのような時制で訳されているのかを取り上げてみよう。このテキストでこれらの表現は半過去で訳されている場合と単純過去で訳されている場合とがある。半過去の例を (21) に、単純過去の例を (22) に挙げた。

- (21) a. “I kept all the keys and *could* go where I liked...” (p. 107)
 b. “As Cuvier *could* correctly describe a whole animal by the contemplation of a single bone, so the observer who has thoroughly understood one link in a series of incidents, should be able accurately to state all the other ones, both before and after”

(p. 116)

- (22) a. In the latter, as may be remembered, Sherlock Holmes *was able*... to prove that it had been wound up two hours ago.

(p. 103)

- b. He spoke calmly, but I *could* see that he was deeply moved.

(p. 120)

(21) と (22) を比べてみると、やはりここにも具体的な出来事の有無が影響していることがわかる。(22) では単なる主語の能力ではなく実際に、*prove* や *see* という行為を行ない得たということ、つまり特定の出来事が存在したということを述べているのに対し、(21) の例ではそのような特定の出来事は存在せず、主語の持つ能力が状態的に表現されていると考えられる。例文の数が限られているので断定的なことは言えないが、フランス語では法的動詞もいろいろな過去時制を持つので、〈可能〉の意味と〈習慣〉や〈出来事〉の意味が共起できる。一方英語では、例えば助動詞 *could* と〈習慣〉の *would* とは共起できないし、助動詞を進行形で表すこともできない。フランス語では、出来事の特定性を時制という形で文法化しているために、英語では不可能なあるいは不必要な区別ができるし、また逆に常にそのような区別をせねばならないのである。これは例えば冠詞という文法範疇を持つために名詞の特定性を常に意識しなければならない英語と、そのような文法範疇を持たないため名詞の特定性は文脈にまかせる日本語との違いによく似ているのではないだろうか。

注

- 1) 英文法では、*tense* (時制) と *time* (時) を区別して用いるが、フランス語文法では両者に *temps* を用いている。我が国では、「時称」と「時」という用語を用いて区別しているが、本稿では英文法の用語に従う。
- 2) Smith (1991) によると、「状態」は汎言語的には始まりや終わりを特定しない状況であり、完了的な時制とは相容れないものである。それゆえ「閉じた状態」を「開いた状態」から区別するフランス語の時制は、フランス語の個別的な文法で説明されるべき特徴だと述べている。(pp. 253-258)

参 考 文 献

- 柏岡珠子 (1989) 「フランス語時称体系の学習一誤りの分析一」, 『甲南女子大学ヨーロッパ文学研究』 13号.
- Quirk, R. *et. al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 佐藤房吉 (1990) 『フランス語動詞論』, 白水社.
- Smith, C. S. (1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer.